

今朝は、主イエスが「わたしは良い牧者」と言われた点を学びましょう。

1. 羊、牧者、雇い人 (10～12節)



- ①盗人と牧者 (10)「盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのめです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」ヨハネの福音書 10章はイエス・キリストによるたとえ話に始まりました。囲いの中に守られている羊たち。羊の牧者たちは門から正規に入ってきます。ところが、他の場所を乗り越えて入ってこようとする者がいるのです。彼らの目的は、羊を盗むこと、殺すこと、滅ぼすことにありました。今ここで、このたとえ話のなかに、イエス・キリストはご自身を登場させて、7節と9節ではご自分が「羊の門」であることを伝えられました。イエスは、さらに10節において、ご自分が来られたのは、羊たちがいのちを得て、豊かに生きるためであると述べられます。
- ②良い牧者 (11)「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」そして言われます。「わたしは、良い牧者です。」(エゴエイミ、ポイメーン、ホ・カロス)。良いと言われたのは、盗人は悪い目的で羊に対するのですが、イエス・キリストは、羊たちを生かす目的で来た牧者であることを伝えるのです。良い牧者とは、どのような牧者かということ、羊を守るためには、いのちを惜しむことなく、捨ててかかられるというのです。
- ③雇い人 (12)「牧者でなく、また羊の所有者でない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして、逃げて行きます。それで、狼は羊を奪い、また散らすのです。」一方、牧者ではない人や羊に愛着がなく、ただ雇われている人は、無責任ですから、狼が来たとしても、まずは自分の命を守り、羊は置き去りにして、逃げるのです。そうなれば、狼は簡単に羊を奪えます。また、羊たちはバラバラになってしまうのです。

2. 良い牧者 (13～15節)

- ①羊のことを心にかけて (13)「それは、彼が雇い人であって、羊のことを心にかけていないからです。」雇い人が逃げ出してしまうのは、羊がどうなっても良いと思っているからだというのです。所有者や小さい頃から育てている人であれば、生育の過程などもよく知っています。いろいろな困難も共に味わってきました。牧者と羊とは、そんなことから絆のようなもので結ばれているのです。
- ②良い牧者の知っていること (14)「わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。」イエスは再度、言われます。「わたしは良い牧者です」。牧者が一頭一頭の羊たちの好みや性質を知っています。それと同じよ

うに、イエス・キリストも従ってくる者たち、キリストを信じて歩む者たちの健康や賜物などもよく知っています。また、羊たちも牧者のことを知っているのです。4節には羊たちは牧者の声を聞き分けると伝えられました。

- ③羊のためにいのちを捨てる (15)「それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同様です。また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。」三位一体なる神のうちにおいて、父なる神は子なる神であるイエス・キリスト（ここでは「わたし」）のことをよくご存じです。また、子なる神（キリスト）は父なる神のことをよくご存じです。両者は一体であるからです。キリストはまた、羊たちの命を狼などから守るためには、11節にも出てきたように、いのちをも捨てるということです。命をかけて羊を守るということです。

3. 父が愛する理由 (16~18節)

- ①ほかの羊 (16)「わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊があります。わたしはそれも導かなければなりません。彼らはわたしの声に聞き従い、一つの群れ、ひとりの牧者となるのです。」「わたしには、この囲いに属さない他の羊があります」とありますが、これはユダヤ人クリスチャンだけではなく、異邦人の中にも羊となる者達がいるということを言われているのです。先週は世界宣教週間でありましたが、イエス・キリストはこの時点ではっきりと、「それも導かなければなりません」と述べておられるのです。全世界にいるキリストの声を聞いて従う羊たちの牧者となってくださると語ってくださっているのです。
- ②父が愛してくださる (8)「わたしは自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父がわたしを愛して下さいます。」「わたしは自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ」とあるのは、キリストが羊である、罪人たちのために十字架にかかって死なれた後に、よみがえって復活の命を生きてくださったことを意味します。そして、その命がけの業は、父なる神が子なる神であるキリストを愛することの根拠ともなるということです。
- ③いのちを捨てる権威 (9)「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」ある面でいえば、十字架の出来事は、人々がキリストを十字架につけよと叫んでいったことに発しているわけです。またピラトや大祭司たちの十字架刑の決定にも困ったわけです。彼らがキリストのいのちを取ったとも言えます。しかし、ここでイエス・キリストは、実を言うと根本的には、ご自身が自らのご意思で命をお捨てになったのだと言われています。そして、そのことをなさる権威をキリストは持っておられ、さらに復活の命を

得る権威も持っておられるということです。そして、それらは、父なる神からの至上命令によるということです。

《結論》

5月16日から、ヨハネの福音書の中にある、イエス・キリストが「わたしは～である」(エゴ・エイミ)と言われた箇所から学んでいます。「わたしはいのちのパンです」を二回。「わたしは世の光です」について二回、6月27日には「わたしは羊の門です」「わたしは門です」から学びました。

今朝は「わたしは良い牧者です」と言われた聖書箇所からの学びです。6月27日分の続きです。その時にも、お伝えしましたが、詩篇23篇にはこのようにあります。「主は私の羊飼い。私は乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます」。ここには、詩篇作者であるダビデは自らを羊とし、主なる神さまが羊飼いであることを告白しているのです。弱く、迷いやすい羊である私たちには、どうしても羊飼いが必要なのです。

今朝、私たちはヨハネの福音書10章の記事から、さらに進んで、イエス・キリストが「わたしは良い牧者(羊飼い)です」と述べてくださっていることをみてきました。牧者は羊に何をするのでしょうか。牧者は羊たちを導きます。そして、羊たちが草を秩序正しく食むために案内をするのです。放っておけば、羊たちは、草の根まで食べ尽くしてしまい、その土地は砂漠化してしまうのです。ですから、適当な時に角笛を吹いて別の場所に移る必要があるのです。また、牧者は外敵である狼などから羊たちを守る役割も果たします。それは今朝の例え話にも出てきました。羊たちを守るために、羊飼いは命を張っているのです。狼が襲ってきても、羊を守るために、自らの犠牲になることも覚悟で、狼に立ち向かうのです。

イエス・キリストも言われます。「わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。」と。これはまさに、十字架の福音が語られています。迷う羊である私たちのために、キリストはいのちをかけて、身代わりとなって十字架にのぼってくださったのです。キリストの身代わりの十字架の死によって、羊である者たちは救われるのです。

もちろん、一方的な恵みによって救われるのですが、私たちがなすべきことは、この十字架の福音を受け入れ、キリストを信じていくことです。キリストの復活と合わせて、信じるならその人は救われるのです。それが聖書のメッセージです。

ところが、私たちは自分が羊であることを忘れがちです。そして、いつの間にか、牧者であるキリストから離れてしまい、人間の力を頼みとして生きようとするのです。しかし、それでは迷路にはまってしまいます。人間がなすべきことはいのちを捨てて、私たちにいのちを与えて下さる方により頼んでいく道です。またその話かと思われる向きもありましょう。しかし、あなたは自らの力により頼んでいませんか。改めて、自分の胸に手をおいて考えてみましょう。結局、人間の魅力、人間の巧みな言葉、人間の力に心が向いていませんか。

もう一度、私たちは迷いやすく、知恵もなく、弱い羊であることを自覚し、あなたのために、いのちを捨ててくださったキリストにより頼んでいきましょう。